

# 小田原史談

第 148 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20

## 相模国足柄下郡府川村絵図

府川村(小田原市)は、足柄平野の西端に位置し、南に諏訪ノ原(久野丘陵)を背にした傾斜地と狩川流域に接した平坦部から成っている。府川の地名が文献上にあられるのは、戦国期で、『小田原衆所領役帳』に「狩野大膳亮 買得 拾七貫文 元福室知行 西郡 府川」とある。ここに掲げた府川村絵図は稲子家が所蔵するもので次のように添書きがある。

### 府川村絵図の字

名主七兵衛病氣ニ付名主役休役奉願候  
願之通文久三癸卯年三月朔日名主役御免  
相成候右ニ付村方込村絵図相渡シ候ニ付  
村絵図面写シ置候以上

元治元年十一月  
府川村  
七兵衛

元治元年十一月  
府川村  
七兵衛

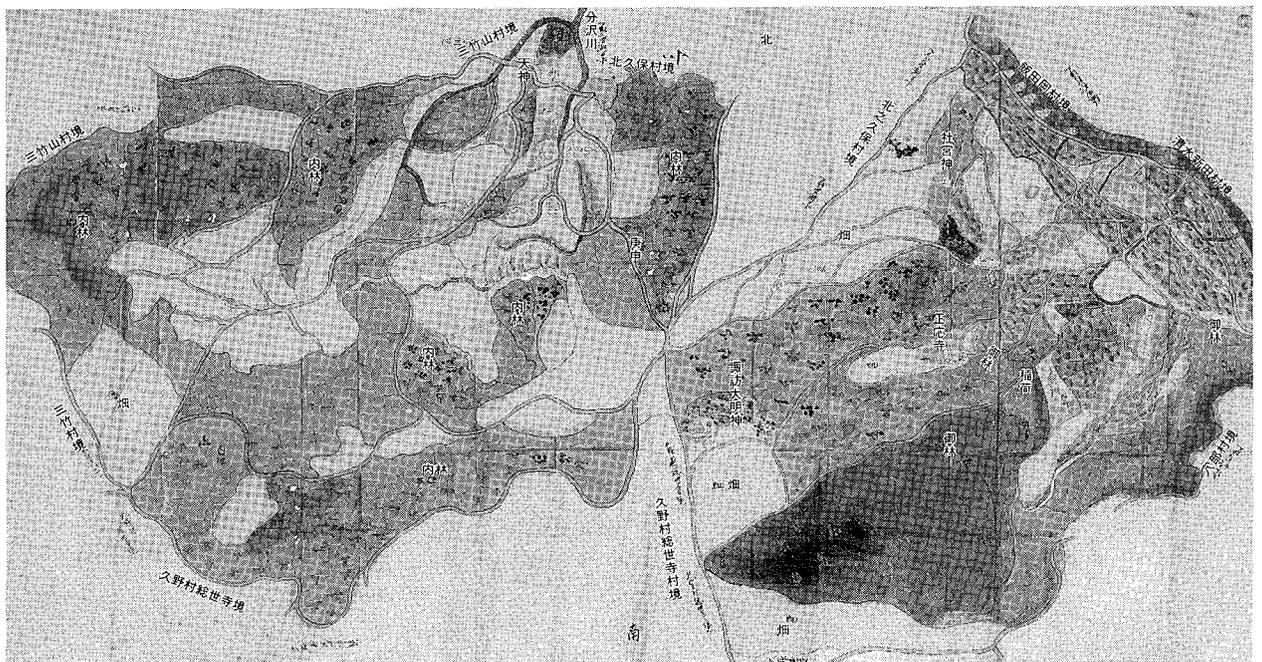
元治元年十一月  
府川村  
七兵衛

この村絵図は、縦三・五cm、横六cmもある大きさで、ここに掲載したものは、説明の文字が判読できないので、かわって活字で表示した。

『新編相模国風土記稿』(以下単に『風土記』)には、府川村の小名として、久所、萬石、楠木、西ノ久保が挙げられている。

そのうち、久所は、絵図の中央部にくびれた箇所から左手の西側にある。「ぐぞ」という地名は、湿地や沼地を意味するという見方もあるようだが、果たしてどうだろうか? 足柄上郡中井町、秦野市柳川にも久所という地名が残っている。府川に古くから住んだ人の姓は、稲子と推野であるが、推野は久所に多い。庚申の表示のある箇所は、久野の斎場に行く道の左手で、現在も供養塔が三基ほど残っているが、久所の入口に立てられたものである。

楠木は、旧道(といっても、絵図にはない)を挟んで府川と飯田岡に分かれていて、表示するのは難しい。萬石は左手東部で、この原図を所蔵する稲子家あたりを指しているが、現在も活きている久所



や楠木の小字のように、使われていない。

西ノ久保は三竹村境に近い所を指しているのかも知れないが、やはり、日頃用いられている小字ではない。

右手の上部にある社宮神は、『風土記』に載る、志夜久地屋之呂と漢字の読みがついた矢作社であろう。社宮神は一般に安産の神様とされている。現在では、その場所は明らかでない。

寺は、『風土記』に載る曹洞宗の萬石山正應寺で、開山は「天正中、僧傳室光禪建」とあるが、開基は村絵図を所蔵する稲子家である。稲子家はいまでも久野舟原・総世寺の大壇那であるが、遠いので府川に正應寺を建てたという。

親義の代に源頼朝に仕へ信州に住み、建久七年(二五〇)正月、親義は日頃あがめて諷訪明神に参詣して武運長久を祈った、という。時代は下って戦国の世、時の

当主時綱は、武田信玄に仕えたが、常州松枝の戦で討死、ときに六十八歳。その子正宗(信濃守)は父の仇を打ち甲斐に戻ったが、信玄より手厚い論功行賞を受け、旗大将を申付けられたと伝えられている。正宗

の子光輝は、信玄、勝頼二代に仕えたが、勝頼が天正十年(二五八)、織田信長・徳川家康らの連合軍と戦い長篠で大敗し、多くの宿将を失ったとき、光輝父子は、諷訪明神に参詣していて戦陣に加わっていなかった。勝頼が天目山で最後のときは、その子勝王丸を預かって信州に潜んでいたらしい。

ところが、天正十八年(二五九)家康が、関八州を秀吉から与えられるようになってきてからは、勝王丸の身に危害が近づいて来たので、光輝は、久野丘陵の辺にひそかに住んでいたが、あまり搜索が厳しいので、勝王丸は武州駒込の少林寺

に預けた、と伝えられる。光輝は、その後の里人と

なって、祖先の位牌を総世寺に預け、また、諷訪明神をこの地に祀り社を造営したという。

諷訪神社の造営年月日は明らかでないが、慶長三年(二五九)に没したというから戦国時代も終わりを告げた文録年間(二五二〜二五)以降に建てられたものであるうか。

稲子家が府川村に住んだのは光輝の子浄清の代で、その頃、府川の里には人は住んでいなかった。近くの住民をとり立てて、この地に住まわした、という。ところで、稲子家の所蔵古文書数は、四千七百余点に及び、旧金井嶋村瀬戸家の所蔵文書数(約四千五〇点)と共に、神奈川県下屈指のものとして、貴重な存在となっている。それだけに、村絵図も多く、『小田原の近世文書目録1稲子家文書』(小田原図書館発行)によれば、六点を数える。

このうち延享二年のものは、「地押」のため養笠之助役所に差出した控えである。府川村は、宝永四年(二五七)、富士山大噴火による災害復旧のため幕府直轄

地となり、享保七年(二五三)再び小田原藩領に復するが、同十一年水害のため、また幕府代官の所管するところとなった。おそらく集中豪雨を受け、山地の土砂崩れや、狩川の氾濫で、田畑が埋まり、民家も大きな損害を受けた、と推察される。

稲子家の所在は現在の所ではなく、他の場所にあった、という伝承も、このときの水害のためではなかったろうか……。

小田原藩領に戻るのには、水害より二十一年後の延享四年のことになる。そこで、村を、また、小田原藩領とするに当たって、代官所が、その復旧の実情把握のため提出を命じたものではなにかと、想像するのだが、延享二年の村絵図は元治元年のものと異って、畑を一筆毎に記録したものと

助の両名が請取人となっている。二人とも幕府官撰の『風土記』編纂にかかわった役人として、『風土記』にその名が収められている。

ところが、この天保五年の村絵図は、稲子家の手元にはなく、所在が分からなくなっている。現存する村絵図は、延享二年、元治元年、年号不明と、その断簡の四点で、二点が行途不明となっている。前述のように、小田原図書館発行の『小田原の近世文書1稲子家文書』を特に挙げたのは、そのためである。また、所蔵袋の整理番号が勝手に書き換えられたものがあるという。

稲子家では、研究者の便宜を計り、快く閲覧や貸出しをしてきた。ところがその善意が踏みにじられたと、いうより他はない。

よく戦前、大学教授など研究者が、古文書を借用したまま返却しなかった、という話を何回か耳にしたことがあるが、いまだそんなことがあるとは、残念なことである。

(岡部忠夫)

# 小田原叢談(八)

## 石井富之助

### 小田原人かたぎ

文政三年(一八二〇)に伊勢國の藤堂光寛の創立した有造館の蔵版に『大日本性気録』という本がある。この本は諸國の人々の人情、風俗を書いたものであるが、その中に「相模の風俗」という記事がある。わたしはまだこの実物を見ていないが、何から写しとったものか郷土資料メモにこれが書き抜いてある。

相模の風俗は、人の氣転が変り易く、栄える縁故を求めて親しくし、今日まで親しんだ人にも、時を得ず勢が落ちると遠ざかり、知はあるけれどかえって知に迷い、義を知っているようで義がないということがある。どうもあまり評判がいいとはいえない。小田原も相模のうち、こ

うザラにあるものではない。

こんなことは全国どこへ行っても同じじゃないかといいたくなるのだが、内心ではそういう面もなくはないと、半ば肯定せざるを得ない点もあって、真っ向から反対するわけにもいかないようである。

小田原はよく保守的だとか、排他的だとかいわれる。これはどうやら風土、環境からきているらしく思われる。

考えてもごらん下さい。小田原は昔から海あり、山あり、川あり、氣候は温暖、空気がよく、水はきれいで、おまけに近くに温泉まである。

食物にしてもそうである、昔、酒匂平野からはすし米になるほどの良質な米や野菜、果物がたくさん生産された。また海からは新鮮な魚介類が豊富にとれた。こんなに恵まれた土地は

郷土史家の中には、小田原には格別これといった産業がない。これは藩主に偉い人がいなかったからではないかと説く者がいる。なるほどそういわれてみると、江戸時代に小田原にはみかん、梅干、かまぼこ、塩辛などの名産品があったが、いずれも土産品の域を出ないものばかりであった。

それでは小田原は何で飯を食っていたかというところ、藩士や領民を対象とする商業収益が主なものであったであろうが、旅人の落して行く金もばかにはならなかったと思われる。

小田原は大久保藩の城下町で、政治経済文化の中心地である。したがって、領民は何かにつけて小田原まで出向いてこなければならなかったであろう。

また小田原は東海道屈指の宿場町である。箱根八里の險阻を控えて旅人はどうしても小田原に一泊することとなる。そのため旅館が百軒以上もあって繁盛した。

これらの領民、旅人が小田原にきて使った金が町全体を潤したであろうことは容易に想像できるところで、だから他藩にみられるような産業を興すことなど特に考える必要がなかったといえるのではないだろうか。

江戸時代に町方から領主へ差し出したいろいろな願書を見ると、どれもこれも今、助成金、お救米を出し

ていただかないと明日にも生活に差し支えを生じ、町内総つぶれになるなどさかんに困窮の状態を訴えている。果たしてそんなに窮迫していたのだろうか甚だあやしいものである。

大体、請願書にさんざつ腹泣き言を並べ立てることは一つの形式みたいなもので、そう書かないと助成金、お救米を出してもらえなかった。領主の方でもその辺のところは十分心得ていて、いよいよ土壇場までこない

と助成しなかったと考えられる節があり、まるできつねとたぬきの化かし合いみたいなものだったといってもよかったですようである。

いずれにしても、総体的に見て小田原というところは裕福であったとはいわなければ、その日その日の生活に事欠くほど貧乏でもなかったと考えられる。自然環境に恵まれ、食物が豊富にあり、ともかく毎日



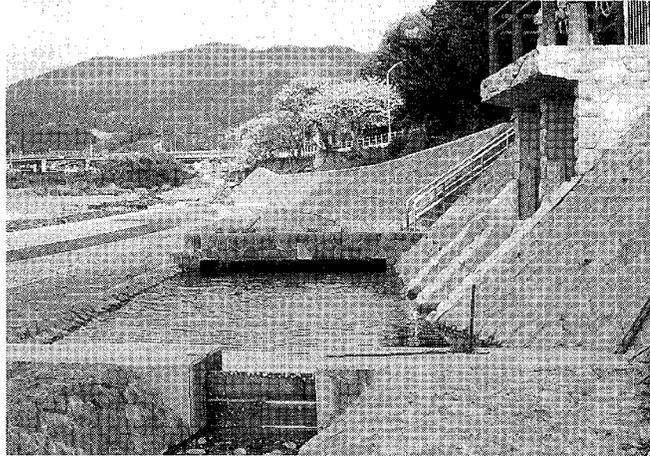
カット 内田 美枝子

を平穩に暮らせる、そんなところに数代を重ねて住んでいたとしたら、だれでもそれに満足し、この状態を維持したい、乱されたくないと願うようになる。小田原人が保守的であり、

排他的であるといわれるゆえんはどうやらこの辺りにありそうである。これを逆にいえば、性質は温和で平和的で、急速な現状変更を好まないということになり、ここに革新がなかなか伸びないという理由があると考えられる。

他の土地から小田原に移住してきたものはみんな成功すると昔よくいわれたものであったが、そういう例はいくらも数えることができる。きびしい生活をしてきた人にとつて小田原はまことによき働き場所であったといえるようである。ともかく、小田原は非常に住みよいところなのである。

ずいぶん以前のことであるが、渋沢秀雄氏が藤倉修一氏とこっしよに図書館へ来訪された。何の用事でこられたのか忘れだが、応接間



小田原用水取入口

でしばらく話し合った。たしか冬のことだ、応接間からは城趾でこだけしかない枯木立がよく見える。渋沢氏はそこへ目をやりながら、

「小田原というところは落ちつきたい町ですね。」

「え、わたしは小田原に生まれ育って、やがて死ぬのしょうが、ほかの土地へ行って住みたいなんて一度も思ったことがありません。」

といったら、

「生粋の小田原っ子がそういわれるところをみると、小田原はほんとうに住みよいところなんでしょうね。」といわれたが、わたしにはお世辞とは聞えなかった。小田原は近ごろ大分変ってきた。それにつれて小田原人かたぎにも当然変化があつてしかるべきである。そういう新しい市民が昔か

### 小田原水道

らある「緑と水の豊かな住みよい都市」をどのように維持し、どのように発展させていくのであろうか。自然と人間とのギャップが広がりがつあり、それが世界の危機の一つとして指摘されている今日、この都市づくりは口でいうほどそんなに簡単なことではなさそうである。

の多数はこれを利用し、近年暗渠の改造も出来、防火及び雑用に供されている。文政四年(二二)に書かれた『辛巳上京農記』という道中記に、

「駅のうち道の中に小川を通し、石でおおつてある。」

とあるのはおそらくこの水道のことをいっているのであろう。

昭和十一年(二五)に土木学会から出版された『明治以前日本土木史』の第七編「水道」のところにこんな記事がある。

小田原水道(早川上水)

小田原の西方板橋村で引水し、幹線水路は山角町光円寺の境内を経て、東海道の大路を疏通し東端新宿町に及び、途中沿道の各町に分水して、あまねく町民の飲料に供し、末流は江戸門外に出て左右の蓮池に注ぎ、余水は灌漑水となる。但し町の北部須藤、竹の花方面は土地が高く水が行かないので堀井戸を使用している。早川

上水は近來暗渠に改造され、現在もお消火並びに町民の雑用に供されているが、施行者及び施行の時期等はいつまびらかでない。考えてみると、小田原の役に細田勘三正時といものが蓮池で討死したことが書物に書かれている。当時すでに蓮池の名が出ているのを見ると、あるいは古く北条氏時代の施設であるかも知れない。その後この地は大久保氏の所領になったが、歴代の藩主は本水道を厚く尊重し、常に修理改善をおこたらなかったから、現在なお町民

郷土研究家はだいたいこの水道は北条時代に作られたもので、日本最古の水道の一つとして高く評価しているようであるが、今から考えると、早川の水をそのままとり入れただけのまことに不衛生きわまるものであった。飲料に供していたというのも決してうそではない。わたしの子供のころでさえ千度小路などでは、たしか共同ポンプがあつて飲み水はそれを使つていたようだが、なべやかまはこの水で洗つていたものであつた。

この衛生的欠陥が具体的な形となって現れたのが、明治十五年(八三)、十九年(八六)、二十三年(八九)のコレラの大流行であつたと

いってよさそうである。明治二十三年八月五日から九月十日までの統計によると、患者数一四二名、治療中二九名、全治一三名、死亡一〇〇名となっている。しかも、その患者が堀井戸を使用していた緑町方面にはほとんどなく、この水道を使っていた幸町、万年町方面に多数発生していることを知ればなるほどとうなずかれるであろう。

このコレラの大流行はその出鼻をくじくほどの打撃を与えるものであった。これについて小田原馬車鉄道株式会社々長田島正勝は「小田原は飲料水がないので悪水を使っており、非常に危険である。小田原はコレラを製造するのに適当の地であるとまで酷評されるようになり、それから来遊者は激減した。」といっている。

が、計画があまりにも大きすぎたためについて具体化されなかった。越えて、明治四十二年(一九〇九)ふたたび上水道敷設が問題となり、大蔵大臣へ申請書を提出するまでに至ったが、今度は町村に対して水道敷設費の補助をすることは前例がないということ却下されてしまった。

その後、いくたの曲折を経て昭和七年(一九三二)水道敷設認可の申請をし、足柄騒擾事件などを引き起こして、ようやく完成したのが現在

の上水道である。この間の事情については『小田原市史料』現代編にくわしく述べられているので、それに譲ることとしよう。

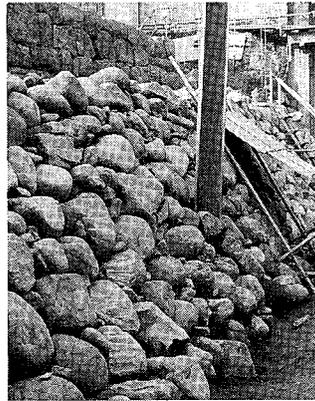
小田原水道はずっと東海道の道の下を流れていたが、昭和三十一年(一九五六)一号国道改修の際、市内電車が撤去されたのと時を同じくして、国道南側の歩道の下に移された。また明治以後須藤町、竹の花方面にも通じ、もっぱら散水用として使われていたが、いつの間にかふさがれてしまった。

### 小田原城址三の丸跡から

#### 玉石積み石垣出土

#### 小田原城址では初

東京電力では、小田原営業所(本町一九国道一号沿い)の別館新築工事に伴い、民間の玉川文化財研究所に委託して遺構調査を進めていたところ、この程、小田原城郭では初の玉石積み石垣が高さ約二メートル、長さ約二十メートルにわたって出土。場所は、三の丸跡に当たる。



は、稲葉氏の時代に築かれた石垣ではないかと見られるところから、玉石は、十六世紀末の江戸期の大久保

小田原営業所別館新築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査  
発掘期間 平成3年9月20日  
平成4年5月28日  
発掘者 東電株 会社  
調査者 京文財 研究所  
発掘協力 株式会社 勝俣組

氏時代に築かれたものではないかと推定されている。なお、玉石は、早川川尻あたりから運ばれたものと思われる。

### お詫び

前号の石井富之助氏の「漁師の天気予報」の最初の稿を手違いでぬかしてしまったことをお詫びいたします。以下初めの分としてお読みくださるようお願い申し上げます。

### 漁師の天気予報

小田原の漁師はだいたい富士、大山、天城、大島の四カ所を見て、三日前ぐらいまでの天気を予測する。

富士の白笠

その日に雨よ

富士の頭に白雲がかかっているると半日経つか経たないうちに雨になる。大島の東の端に黒雲の笠があれば雨。天城の雨雲はかならず小田原に来る。大山は単に山を境にこちらに降るか、向う側に降るかをその下ろしぐあいで見るといふ。

これだけではないかにも不十分だったが、ともかくメ

モに書きとめておいた。その後忘れるともなく忘れていたが、それから二十年も経ってからまたこのことを思い出し、そうでもう少し詳しく調べておこうと思いついた。

ちょうどその頃児童文化館にいた佐藤康治君がやはり漁師町に住んでいたのだから、間もなくつぎのように聞き書きを整理して持ってきてくれた。

(以下一四七号「漁師の天気予報」に続く)

# 近代小田原百年小史稿(五)

## 高田喜久三

### 大正期の小田原(二)

小田原の大正期をマクロで捉えれば、我国の近代資本主義が漸く成長して早くも、列強の植民地獲得競争に巻きこまれてゆく中で、田舎町の小田原は資本主義成長の余香をやっと手にした時期と言える。

しかもこの繁栄の余香は短期間に終り、大正十二年(一九二三)九月一日の関東大震災はその夢を無惨にも叩きつぶしたのである。関東震災は単なる自然災害だけでなく、歴史の転換点をもたらした意味で、大きなドキュメントであった。つまり極く短期間に燃えさかった大正デモクラシーと大正文化は、思いもかけなかった震災の痛手の中で激しく変質して、昭和時代に入るのである。だから震災後の大正期は昭和前期と名付け方が適当かも知れない。小田原における関東大震

建したことは、当時の住民感情としては無理からぬこととは言え、今日になっては歴史的ダメージとなつて多くのトラブルを生んだのである。

震災の痛手からようやく立ち上がるうとする小田原の人々の上に襲いかかったのは世界的大不況の暗雲であった。それでも大正の終りの十五年までは何やかやと復興の槌音に乗って目先きのことで忙しかった小田原にも、世界恐慌の嵐は年毎に深刻化し、やがて昭和四年の経済パニックへつらなっていくのである。

だがマクロで見た大勢はそのようであるにしても、焼土小田原の復興の姿は目を見はるものがあった。大正十三年には湯河原まで鉄道が延長し、翌十四年にはついに熱海まで開通した。この時小田原町民は花車を索き提灯行列をしてこれを祝った。この時からいよいよ箱根に加えて、湯河原・熱海という温泉観光地が小田原の経済圏に入ったのである。このことは小田原人を大いに勇気づけ、加えるに同じ大正十四年には大雄山鉄道も開業した。そして

この時小田原町の人口もようやく二万五千人に達したのである。

鉄道だけではない。大正八年には富士屋自動車(株)が国府津・箱根町間の乗合バスを開業、同じく同年には湯本・強羅間に登山鉄道も開業している。乗客だけではなく物資輸送にトラックが姿を見せるのもこの頃である。このことは震災後、国道の拡幅及び舗装が始まり、同時に各地区の道路が同様に拡幅整備が進んで行つたことを示している。

震災は我国の経済に大きな打撃を与えたが、人々はそれを乗り越え、むしろ新しい時代へ向けて奮い立ったのである。同じように災後は文化の面にも大きな革新をもたらした。一口に言えば人々の生活面にモダニズムの隆盛を

促したのである。小田原でも災後からボツボツ洋服姿が見られるようになり、女性の髪型も洋装が主力になつてゆく。文化の面にもっとも大きなインパクトを与えたのはラヂオの出現である。ラヂオは大正十三年、芝、愛宕山に放送局が設置されて放送がはじめられた。小田原でもそれから二・三年のちにはまたたく間に普及されて行つた。そして大正十五年には全国の聴取者



大正初期の小田原町通り(小伊勢屋前) 故・尾崎春彦氏撮影

二十万と言はれた。  
ラヂオの普及と並んで映画文化が百花繚乱を迎えるのもこの時代である。ことに洋画のはんらんは全国民を魅了し、現代の情報化社会はこの時から始まったのではないかとさえ思わせる。

小田原でも震災以前から富貴座、有楽館(のちに吾妻座、現在のオリオン座)があつて映画好きの町民を喜ばしていたが、災後は青物町に復興館が開業し又御幸の浜通りに娯楽館が開館して映画ファンを満足させた。

もちろん当時の映画は、白黒、無声、活弁なる解説者がくらやみの中で熱演するという、今から見れば珍奇なものだが、観衆は見たこともない外国の風物、外国人の暮らしぶりを見て熱狂した。日本映画も初期の

稚拙なものからようやく脱皮し、ことに時代ものには「大河内伝次郎」「阪東妻三郎」らのスターが誕生して「照る日曇る日」「鳴門秘帖」又は「国定忠治」等々ファンの喝采を博した。  
映画の世界だけではない。

大正四年から始まった全国中等学校野球大会は、大正十三年に甲子園球場がひらかれるや、以来今日まで全国民を熱狂の渦に巻きこむことになる。もちろんラヂオの普及がこのフィーバーを盛り上げたことは言うまでもない。小田原でもこの頃からアマチュア野球全盛時代を迎える。かくして大正時代は十五年十二月の大正天皇崩御をもって終るのだが、要すればこんにち私たちが享受しているいわゆる文化と称するものの大部分は、まさに大正期に生まれ育てられたものと思うのである。

## 丹沢の植物

⑪

### 城川四郎

昔、アイヌが毒矢に用いたとして古くから知られているトリカブトという植物は、最近誰かが人殺しに使用たらしいというので新聞テレビに登場して改めて有名になった。神奈川県でも少し山に入れば普通に生えている植物である。

西にはヤマトリカブトが普通であるが丹沢の上部にはこのカワチブシが分布する。その特徴は雄しべにも花柄にも毛がないことで、花や葉の形などではヤマトリカブトと区別できない。

若い葉と成長してからの葉ではかなり違う。この若い葉はニリンソウの葉に似ているので間違えて食べ中毒する人がある。秋に濃い青紫色で西洋の騎士の兜のような形をした花を咲かせる。丹沢のトリカブトにはヤビツブシ、タンザワブシ、オオヤマブシと名づけられた種類があるとされ、私にはその実体がわからず長年

標本を集めては悩んでいたが、近年の研究で結局それらはヤマトリカブトやカワチブシの一型に過ぎないとされ、それらの実体は本当は誰にもわかっていなかったことがはっきりした。カワチブシは、関東から近畿地方までの主として太平洋側に分布するが、箱根では確認されていない。

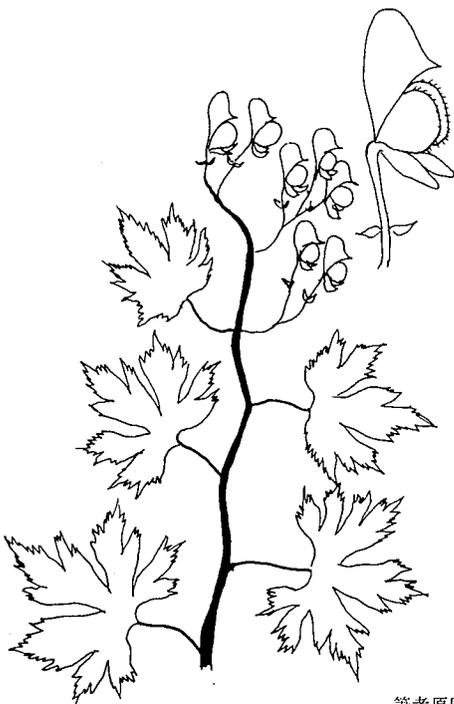
大正四年から始まった全国中等学校野球大会は、大正十三年に甲子園球場がひらかれるや、以来今日まで全国民を熱狂の渦に巻きこむことになる。もちろんラヂオの普及がこのフィーバーを盛り上げたことは言うまでもない。小田原でもこの頃からアマチュア野球全盛時代を迎える。かくして大正時代は十五年十二月の大正天皇崩御をもって終るのだが、要すればこんにち私たちが享受しているいわゆる文化と称するものの大部分は、まさに大正期に生まれ育てられたものと思うのである。

そのトリカブトというのは、ヤマザクラやヒガンザクラなどを総称してサクラと呼ぶのと同じように、近縁植物の総称名である。トリカブトの分類は難解でかなり混乱があつたが近年整理されて二十種ぐらいにまとめられ理解されやすくなった。

ここにご紹介するカワチブシもそのトリカブトの一種で初め大阪の河内で見つ

### カワチブシ(きんぼうげ科)

*Aconitum grosse-dentatum* Nakai



筆者原図

# 小田原の浮世絵 (六)

岩崎宗純

(九) 小田原北条氏と浮世絵

先に本誌一四六号で石橋山合戦をテーマとした浮世絵を紹介しました。江戸後期歌川国芳一門を中心に描かれたこのような武者絵は、近年再評価の聲が高く、小田原市でも博物館構想を進めるにあたっては、是非調査収集の対象にして欲しいと思います。

石橋山合戦を幕開けとして源平争乱の時代を描いた浮世絵と同じように、浮世絵師の描く武者絵には、戦国動乱を描いたものが数多くあります。

その中でも量質ともに注目されるのが上杉謙信と武田信玄の対決を描いた川中島合戦絵です。幸いこの合戦絵は、酒井雁高・小林計一郎編の「浮世絵川中島大合戦」(白文社・一九六一年)に集大成され、一覽することができるようになりました。

同書によると、川中島の合戦を描いた浮世絵師は三名、作品は五四点を数えます。これらの合戦絵を見ますと、浮世絵師たちが、遠近法、クローズアップ、

さまざまなほどの集団描写など、さまざまな画法を駆走して自分独自の合戦絵の世界を描出しようと懸命になっていたかが伺われます。

さて、戦国小田原北条氏の活躍を描く合戦絵にはどのようなものがあるでしょうか。実はわたしもこの分野の浮世絵の調査収集を始めたのは最近のことです、その全貌を掴み切っていないといった状態です。ただいままで調べたなかで考えますと、小田原北条氏の合戦を描いた浮世絵は数が少ないのではないかと思います。では、私の目に触れた範囲でその作品を紹介してみましよう。

歌川芳虎「北条父子宇都宮城攻之図」(大錦三枚続・

明治元年閏四月・万屋松兵衛)

北条氏政・氏直父子による宇都宮城攻めを描いたものです。この作品は『小田原市史資料編・小田原北条氏I』のポスターにカラーで紹介されていますので、すでに見覚えの方もいるかも知れませんが、画面右手に黒馬に跨る氏政、中央に氏直を描き、その左右に北条陸奥守・松田尾張守・大道寺駿河守ら北条氏の一族・重臣を配したこの合戦図は構図もなかなか見事で豪壮華麗な戦国絵巻といった感があります。

ただし、この作品は厳密な歴史考証に基づいて宇都宮城攻めを復元したものではありません。北条氏の宇都宮城攻めは、記録に残る中では、弘治三年(一五七二)二月、天正二年(一五七四)二月、天正一四年(一五六六)五月と三回行われていますが、本図がその中でどの合戦を描いたものか定かではありません。恐らく三つの合戦をまとめて総体として描いたものであらうと思います。芳虎はこういうことをしばしば行っています。あの川中島合戦も、天文二三年(一五五三)八月、弘治二



歌川芳虎 北条父子宇都宮城攻之図

### 郷土誌目次紹介

年(二葉)三月、永祿四年(二葉)九月の三回の戦いを、三枚続の同一画面に描いた作品がありますし、「川中島合戦」(弘化四年)嘉永五年・山甚)、次に紹介する国府台合戦図もそうです。

歌川芳虎「北条九代記鴻之臺合戦」(嘉永五年十一月上金)・国府台(鴻之臺)において北条氏と里見氏が

親子二代にわたって戦った合戦の様子を同一画面に描いたものです。

第一次合戦は、天文七年(二葉)里見義堯と小弓御所義明とが結んで、北条氏康と戦ったもので、北条氏の大勝におわりました。第二次合戦は、永祿七年(二葉)再び勢力を盛りかえした里見氏が、氏康・氏政ら率いる二万の北条軍と戦っ

たものです。里見軍は善戦し、一時は有利に見えましたが氏康・氏政らの本隊の大攻勢の前に総崩れになりました。

芳虎には、そのほかに「里見左馬頭義弘相州城ヶ島にて北条と戦ふ」(大錦三枚続・伊勢兼)という作品もありますが、未見なので後日を期したいと思えます。

#### ◇ おだわら

歴史と文化

- 小田原市役所文化室編 小田原市萩窪三〇〇 電〇四六五(33)二七〇二
- 第五号 '91・10 A5一三九頁 一、二〇〇円

〔論文〕

房総における天文の内乱の歴史的位置―とくに上総真里谷武田氏の動向を中心として 佐藤博信

徳川氏の関東入国と小田原の位置 村上直

小田原士族と西南戦争 宮坂博邦

〔研究報告〕

上杉朝良の小田原攻め

#### 〔調査報告〕

- 森 幸夫 統 地蔵と縁日―板橋地蔵信仰の展開 西海賢二
- 小田原市久野の婚姻儀式 谷口 實

〔市史の広場〕

- 統 大正から昭和初期にかけて まちの発展のため骨身を削った尾崎亮司 岡部忠夫
- 小田原の算額 天野 宏
- 〔追悼小特集〕
- 内田哲夫氏の思い出 (執筆者)石井富之助、内田四方蔵、野地敏雄、由井正臣、宇佐美ミサ子、福田以久生、小泉政治、森德行、津田敏子、原正

#### ◇ 芦間乃道

立木望隆主宰

- 郷土文化研究会編 小田原市久野一五九〇 電〇四六五(35)二四四五
- 第四十号(平成四年一月) A5六七頁 七〇〇円

川崎長太郎の文学碑

- 中世・井ノ口村の中村氏の居館址? 加藤兼吉
- ゆうすけ君の郷土史―二宮先生を語る 立木望隆
- 愛新覚羅ゆかりの旅 高橋佐年
- 参加して 座談会③北条氏政夫人黄梅院2―三国同盟余談
- 北条早雲生国説を追って・訪杖記(山城宇治説)②

宇治田原を歩く

- 立木望隆
- 久野の歴史と民族・伝承その他② 小野春松

#### ◇ 戦争と民衆

- 戦時下の小田原地方を記録する会 小田原市栄町三一三―二二六 第26号 '91・10 A5二三頁
- 〔聞き取り〕
- 小田原空襲の不発弾を処理して 小野一男
- 戦時下の材木商 高田喜久三
- 小田原市内の戦争碑―戦前の碑と戦後の碑 小俣晴俊
- 昭和20年3月の「わが日録」から 久米 茂
- 〔参加記〕
- 空襲・戦争を記録する会

#### ◇ 西さがみ庶民史録

- 小田原市飯泉二七六 西さがみ庶民史録の会 電〇四六五(47)五九〇九
- 第28号 A5 48頁七四〇円
- 河野一族の系譜と栄光 河野洋平大いに語る 川口真男
- 酒匂川の一層優る 鮎の味 村井弦齋
- やっぱりあつた熱海行汽船 早川舟付場
- 天逝した二人の小田原詩人 志沢正躬・山崎正一の軌跡 小田川純
- 小田原時代の北原白秋 藪田義雄

#### 百年前の主な出来事

- 〔明治二十五年〕
- 二月十二日 天然痘発生、治療所開設
- 四月一日 幸学校を啓蒙学校女児部、従来の啓蒙学校を啓蒙学校男児部と改称
- 四月十一日 午後十時 瓦長屋(小田原市南町一丁目)より出火、啓蒙学校男女部共に全焼
- 四月 芦子学校、新校舎に移転
- 五月二十日 福住正兄没す 六十九歳
- 六月 湯本・箱根電燈所在来の水車場利用、湯本に電燈供給
- 九月十二日 報徳二宮神社設立認可
- 十月十一日 啓蒙学校、尋常高等小田原小学校に改称
- 十二月十九日 豆相人車鉄道設立認可
- この年、造林のため久野山組合結成。酒匂橋架設

第21回全国連絡会議愛知大会に参加して 井上 弘

# 私の早川村誌 十二 村を潤した車川

青木友吉

『小田原市史』史料編近代  
Iの付録に明治二十六年  
(一九一三)二月発行の小田原  
町の絵図が添えられていて、  
その図中に、小田原の町境  
に車川といふ早川の支流が  
示されている。

それは、『風土記稿』や  
『皇國地誌』に載る車川と  
は異なる箇所を流れている。  
その川は菖蒲川というの  
が正しい。菖蒲川に米搗の  
水車が多かったので車川と  
呼んだにしては、早川村の  
車川と接近していることを  
見れば、明らかにおかしい。  
地図の誤りであることを指  
摘しておきたい。

しかし、その地図を『小  
田原市史』の付録としたの  
も、違っているのを万般承  
知された上でのことで、た  
だ明治二十六年といふ今か  
ら百年前に、小沢與助とい  
う小田原町万年四丁目六百  
八十番地に住んだ人が著者  
出版人となっているのが珍

らしいといふ観点からであ  
ろうか。

私は早川の生れでいささ  
か早川の歴史に関心があり、  
この車川が早川の歴史に多  
大な貢献をしたのではない  
かと思っている。

『風土記稿』には

車川 村西字大口ニテ早  
川ヲ分派スルモノ是ナ  
リ。 村内ノ用水トナ  
シ南シテ海ニ入。  
幅ニ土橋ヲ架ス

さらに『皇國地誌』(早川  
村誌)をみると

車川 丑五十五度本郡板  
橋村ヨリ字奥平時ニ來  
リ東北部ヲ東へ七百二  
十二間(約二、三一二  
メートル弱) 巾二間  
(約三、六メートル) 或  
ハ三間黄二度字河原  
ヨリ海ニ入ル全村水田  
ノ用水ニ供ス

ところが昭和三年(一九二八)  
七月の測量で早川港の計画  
が定まり、昭和十五年(一九  
四〇)十二月二十日小田原町  
と早川村との合併が終り、  
小田原市の誕生となった。

太平洋戦争も終結し、昭  
和二十四年(一九四九)名も小  
田原漁港と改まり、工事が  
始まった。

昭和四十三年(一九六八)一  
月、小田原漁港の完成をみ  
た。

車川の大半は港内におも  
こまれてしまっている。

残った川は道路となりそ  
の下にヒューム管による流  
れがあり港内では鮎が群が  
る姿がみえる。

川は一夜城の山裾を流れ、  
海蔵寺前で合戸川と堰によっ  
て分派されている。

大古勝手気儘に流れてい  
た早川を平安時代、早川牧  
から早川荘に移る時代、一  
応治水による川ではないか  
と思はれる。

早川のこの狭い土地に、  
前平時、中平時、大平時、  
平時、奥平時の時字が五つ  
もあり、牧から時の時代即  
ち治水の時代であると思は  
れる。

鎌倉時代阿佛尼が『十六

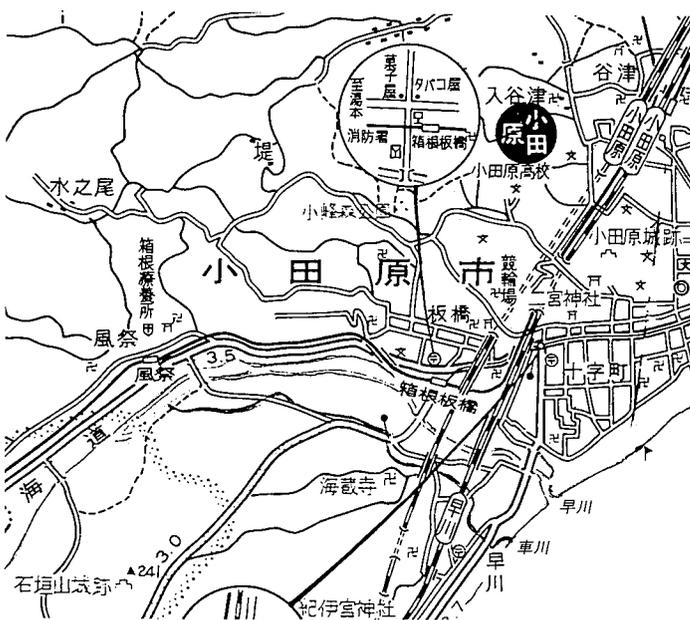
夜日記』に麓に早川と云川  
あり、実に早し、木の多く  
流るゝを、いかにと問へば、  
海人の藻塩木を浦へ出さん  
とて、流すなりといふ。  
東路の湯坂を越えて見渡  
せば塩木流るゝ早川の水。  
材木を相模灘に流し採集  
する愚をとらなかつたと思  
はれる。

車川の取り入れ口、大口  
の近くに貯木場をつくり、  
海蔵寺前で、藻塩木と、木  
地材とを仕分けしたのでは  
ないかと思はれる。そして  
木地挽の地名が生れた。

尚関連地名に早川山中標  
高百五十メートルに六郎石  
がある。轆轤師地名である。  
次に車川を利用したと思  
われる綿実油絞りにかかわ  
りある觸書きを参考迄に掲  
げる。

御觸書

宝歴九卯(一七五九)年八月  
燈油之儀、寛保三亥年(一七  
三三)ニも相觸候通、油直段  
高直ニテ諸人之難儀相成候  
故、國々より菜種作増、大  
坂表え積廻、油直段下直ニ  
可相成處、近年又候撰ニ相



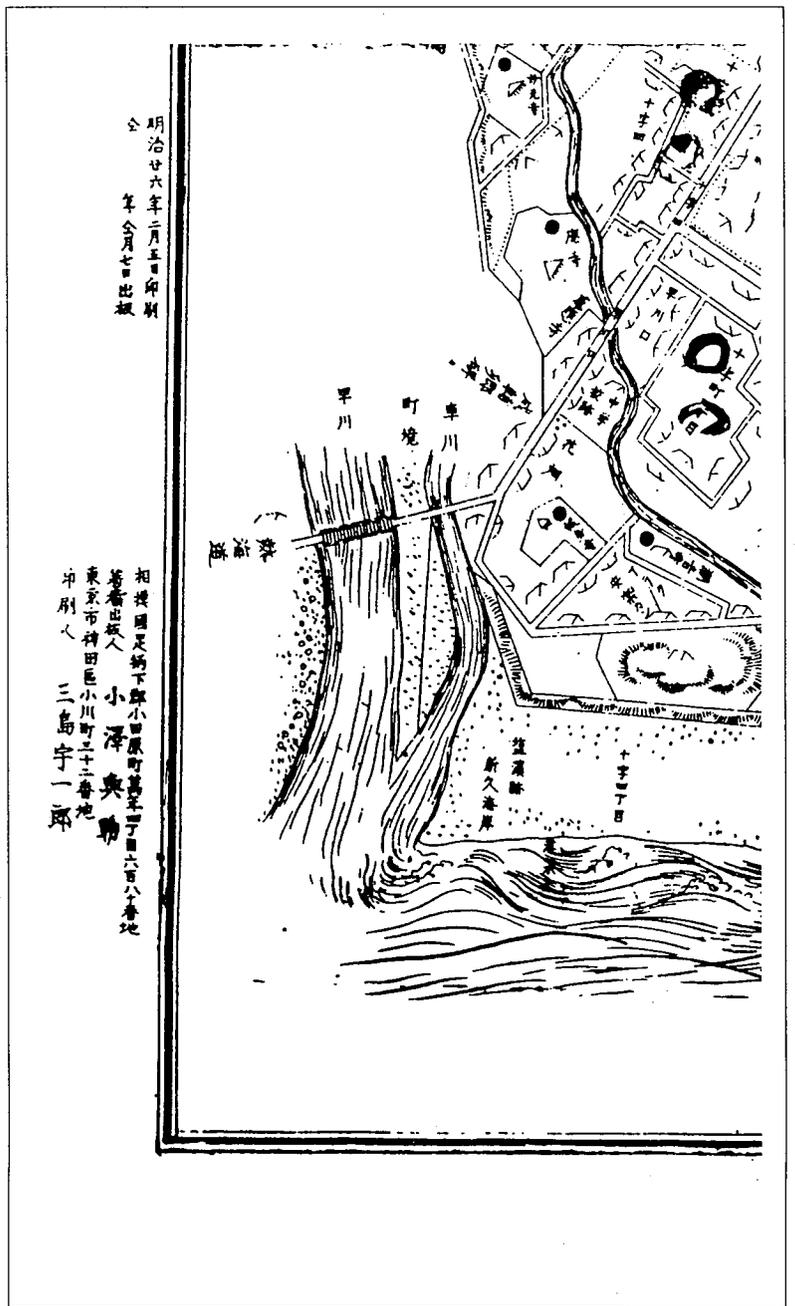
成、大坂え積廻候菜種無數ニて、油高直ニ候、尤豊凶ニも可依事ニ候得共、是迄直段格別下直と申儀も無之付、國々より大坂え積登セ候油種、先年之通、攝州兵庫、西宮并紀州・中國筋、四國筋、西國筋ニて絞候油売拂候節は、右之國々之分は江戸表え不致直積廻、且菜種等之儀も随分作増、大坂え積登セ可令売買候、一綿實之儀も、近年専水油ニ絞出、菜種同様之事ニ候上は、向後大坂綿實問屋相定候間、右問屋之内え積登セ可申候、諸事菜種同様ニ相心得可申候、右之趣、此度改相觸候上は、大坂え積登セ之菜種綿實、他所ニて猥道買或は舐下買且隠絞致間敷候、勿論大坂表問屋共菜種賣買込升之紛鋪儀向後不為致、尤是迄取扱候口銭之掛り物までも、今般相改引下ケ、大坂問屋々ニて明細ニ懸札ニ記差置、無謂余慶之懸り物無之様取計、聊疑敷儀致間敷候、若用ひさる族於有之ハ、遂吟味、曲事ニ可申付條、諸國一統急度可相守候、右之通、御料は御代官、私領は地頭より可觸知者也、八月

御觸書  
 明和三成(一七六六)年三月  
 燈油之儀、寛保三亥(一七五三)年相觸候以後、宝歴九卯(一七五九)年猶又改相觸候処、右卯年觸書之趣をも不辨、寛保三亥(一七五三)年大坂町奉行にて申渡候通、今以一年國切草買受、絞油稼いたし候もの有之段相聞、心得違之至ニ候、依之猶又相觸候條、何れ之國々ニても、手作之絞草を以手絞ニ致し、

御觸書  
 其分之油を大坂表出油屋共え可積登儀ニて、一村之内たりとも、他の絞草を買受、絞油稼致し候儀は不相成事ニ候間、其旨相心得、諸國一統卯年相觸候趣、彌無違失、急度可相守候、右之通、御料は御代官、私領は領主、地頭より可觸知者也、三月

御觸書  
 明和四亥(一七五七)年三月  
 関東筋ニて作出綿實之儀、此度江戸小網町貳町目多田屋直三郎、神奈川宿源兵衛え買問屋願之通申付、右買受候綿實相州足柄「下」郡早川村ニおるて燈油絞、江戸問屋え売渡候善ニ候、依之関東八ヶ國より作出候綿實之内、是迄大坂表え積登候分は格別、其余は右式軒之問屋え可売渡候、此旨荷

御觸書  
 明和七寅年(一七五〇)八月  
 水油直段高直ニて、諸人難儀之事ニ付、下直ニ可相成趣、従先年度々相觸候處、銘々渡世之勝手而已ニ拘、



明治廿六年二月五日印刷  
 年令月七日出版

無益之費失却等有之、菜種綿實豊凶之無差別、兩種物大坂え之登込少、油直段高直二付、猶又此度吟味之上、出油屋油問屋え可受取口錢減少申付、且又菜種綿實大坂表え廻着之上、絞油屋共組合買と名付候買方ハ不束之儀ニ付、向後相止、大坂之外攝、河、泉州村々ニても油稼株相定、右絞草買口左之通可相心得候、

攝州 免原郡  
八部郡

# 母の白い脛はぎ

## 一、やなぎの虫

私は生まれつき大変な病弱で何時も青い顔をして居り、時々ひきつけてぐったりしてしまつた。農繁期等母と二人で留守居をし、他の者は総出の野良仕事の最中、「もう駄目だ」「今度こそ本当にいけない」と何回近所の人に呼び返された事か。祖父母や父はその都度鍬や鎌を投げ捨てたまま家

武庫郡  
一水車油稼

右絞草綿實は、大坂を除、五畿内并関東筋、四國、中國、九州筋、其外何れ之國々よりも勝手次第買入候積、菜種は右免原、八部、武庫三郡之内にて相互ニ買入、其外にては買取申間敷候、(以下略)

〔註〕絞りに、水車油稼と人力油稼とがあるが、車川にて水車利用の油絞

# 西山銈太郎にしやまけいたろう

に駆け戻つた。

数え年五歳位の冬だつたらうか、いろり端で父の膝に抱かれて、今日は体具合がよかつたことを褒められ、何とはなしに嬉しくなつて甘えて泣き度くなつた一駒が、今日なお思い出される。何処の神様はご利益がある。あそここの地藏さまは、観音様は靈驗あらたかだと聞くと、誰かが必ずお参りに行つた。一月十四日道祖

りが行われたと推定し得る資料である。

御觸書  
明和八卯(一七七〇)年六月  
関東八ヶ國より作出候綿實の内、是迄大坂表え積爲登候分は格別、其余綿實の分は、江戸小網町貳町目多田屋直三郎、神奈川宿源兵衛え可売渡旨、去ル亥年申觸置候處、右小網町貳町目直三郎店之儀は相止、江戸本船町油問屋九兵衛方にて、

神祭りの節、七ヶ所の道祖神へ供えられたそばを食べさすといと聞いた父はお賽銭を持ち、私を肩車にのせて七ヶ所の道祖神巡りをした。その他鍼、灸等もよく連れて行かれた。

七月下旬から八月上旬中農閑期の一日、家から出た者は皆妻を、夫を、そして子供等を引き連れて実家へいきみたまに集まる。母親の献立方針に随つて、ベチャクチャしゃべり御馳走を作る。その御馳走を食べながらお喋りは続き、食べ終わつてからも夕食迄ワイワイガヤガヤが続く。正月のお年始と共に一年二回、ちりぢりになつた兄弟姉妹のこの

直三郎、九兵衛兩名を以買受、并相州足柄下郡早川村ニおゐて、燈油絞共二兩名を以相稼苦ニ候間、関東八ヶ國より作出候綿實売渡方之儀、荷主中買并寄居共ニ至迄、亥年相觸候趣急度相守、大坂表え積登候外は、右問屋え売渡候様可致候、右之通、御料は御代官、私領は領主、地頭より可觸知者也、

六月  
右之趣、可被相觸候、

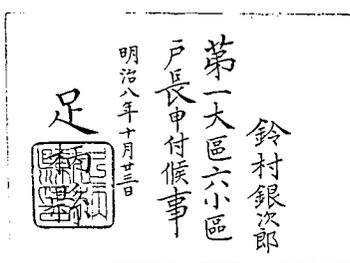
徳川幕府御觸書の明和八亥(一七七〇)三月より明和八卯(一七七二)六月迄の間は、確實ニ綿實を早川村に於て絞つたことは明らかである。原料の綿實は当然廻船の使用であり、工場はこの車川の岸辺にあり、荷受・荷渡は川舟による車川の利用であつたと推察される。

この川に近く、勘蔵船と上ない楽しみの日である。私の様な病身の子供には川やなぎの虫が良いと聞いた母は、他の兄姉達(母は末子)の団樂の群からこっそりと私を連れ出して、田圃の小川の堤へ行つた。堤にはやなぎが列をなして生

いわれる関家、又相田家も廻船業を営んだといはれてゐるがその年代は残念ながら確認されていない。

又小田原藩の鉄砲指南といはれた三元家(眞福寺)に車川の右岸で火薬の製造をしたといふ位置を知る古文書があるという当主よりの話はきいたが実物は見えない。

この車川は單に、村内の灌漑用水や、生活用水だけではなく、古代より多くの役目を担っていたのではないかと思われる。



えている。堤は小さく川の上の方迄出た枝もあり、うっかりすると川に落ちてしまふ。母は足をふんばり白い脛を出して虫を取つた。大人の小指程の枝に虫くそを探し、そこを折ると白い虫が居る。これをやいて食べ

るのだが、その正体を知っている私は食べない。母は色々考えた末に私を寝かせて後、虫を少し余計にコンガリと焼き、小麦を炒り、双方共石臼でひく。砂糖を少々きかせて私に舐めさせて。

これではとても兵隊に行くどころか、一人前にはなれないと思われたが、小学校五、六年生頃から徐々に健康を取り戻して来た。

昭和五(二五三)徴兵検査時には、一メートル六十八、六十二キログラム余りになって甲種合格。神奈川県は近衛は近歩二(近衛歩兵第二聯隊)に入るのが例だったが、出来れば近歩一への秘かな念願を達せられ、一年半の激務にも耐えて無事除隊が出来た。

二、輸送列車

昭和十五年(一九四〇)六月、私に初めて臨時召集令状が来た。その十二日近歩三に入隊し補充隊に勤務した。私の仕事は近衛兵としての禁闕(皇居)守衛勤務と新しい兵隊の教育だった。補充兵や初年兵を一人前にしては戦場へ送った。が、その兵隊だけを戦場へ送るの

は私には耐えられない事だった。下士官が一人ついて行くので私をと言ったが希望は達せられなかった。何回目かの後やっと願いが叶えられた。

昭和十七年三月一日。私共第十野戦補充隊歩兵第三大隊を乗せた輸送列車は貨物線を走り、これと併行して走る京浜東北線の電車は、我々を追い越し、各駅に停車しては我々に追い越された。皆こちらを向き笑顔をして「パンザイ」と手を振って呉れた。しばらく外を眺めた兵隊は、一人疲れ二人疲れて、その数は段々に少なくなった。「折角パンザイと送って呉れるのだ。交代で外を見て應えてやれーッ」と私は大声で言った。何処の山野に屍を曝して果てるのか、或いは無事の帰還出来るのか判らないが、これで戦場へ行くのかと思う程に、皆落ち着き払って。十二時になった。輸送列車は國府津駅に入った。南側の窓を開けて半身を乗り出した。列車はホームの横を迂る様に走る。駅員も表示板も東に飛んだ。駅舎も電柱もふっ飛んだ。長いホームが終わって、レール

も何條も敷設してある貨物ホームの方に出た。目を皿の様にして前方を見た。居たッ。私は手を振った。判ったッ。

連日の農作業で真黒の父母、子供を背負い今迄こんなに美しいと思った事のない妻が、妹が、妻の父母、母の実家の従兄が。みんな手を振った。「判ったッ」と思ったら東向だった皆が一斉に西向になって、振ってる手が小さくなった。と同時に女が二人躡進する列車を追って駆け出した。その二人の女、母と妻の母の姿はまたたく間に小さくなった。妻の母が追うのをやめた。母はまだ走ってる。私は痛くなる程に手を振った。まだ走ってる。顔も、着物の裾をけて見えた白い脛も見えなくなり。やがて黒一点になって走る母。それも見えなくなった。私はまだ手を振ってた。それ等はほんの瞬間の出来事だった。輸送列車は何事もなかった様に、鉄路の上を西へ、戦場へと走りに走った。

同島の警備、義勇軍の育成、南、後北海岸の築城、やがて終戦。その直後の治安の維持や連合軍の作業等に従事し、昭和二十二年(二五三)二月末帰還した。この満五年間、母は私の胸の中で着物の裾をけり、白い脛を出して躡進する列車を追い続けた。女としては大きい方だったのに、髪は銀髪と化し、生来色白だった肌は皺で覆われ、足はズルズルと引きづって歩いてた。

三、母の遺骨を抱いて

それから二十七年後の昭和四十九年(二五三)一月二十一日、骨と皮許りになった母は子供等に手を握られたまま眠り続けた。枕元の子孫は大きい声で呼んだ。その度に物憂さそうに僅かに開いた目も段々細くなり、やがて皆でいくら呼んでも開かなくなつた。

間しかたっていない夜中なのに、私は涙など流しては居られなかった。

越えて二十三日は、我が心のふるさと近衛歩兵第一聯隊は、軍旗拝受百周年記念を迎えた。神奈川県近歩一会は、此の年は此の日に総会が行われた。その総会が行われているだろう午後一時、小川の堤の上の白い脛、列車を追った白い脛は一片の骨と化し、私の胸に抱かれて菩提寺へ向かった。私の胸の中で列車を追いつつ。私は数多い見送りの人々の顔も判らぬ程に、何時迄もいつ迄も涙が止らなかつた。

(付記)

本稿は、筆者が近衛歩兵第一聯隊戦友会誌『全国近歩一會報』No.39(昭和63年10月刊)に寄稿されたもの。母を追慕する気持ちがあふれた佳品で、本誌に再録させていただいた。





# 材木屋綺談 その六

## たかた・きくせん

復興の槌音が高らかに鳴り始めた。世は正に復興ファイヴァーと云った。復興音頭や復興踊りが流行り、小田原には復興館と呼ぶ映画館も出現した。そして

一九二三年大正十二年九月一日の関東大地震は、小田原をはじめ南関東一円を焦土と化した。やがて焦土の中から

て遂には生木大黒天が城山にお目見得するのである。大正十三年秋のことである。もちろん復興に復興をかけたキワモノの新興宗教の金儲けであったのだが、大黒天を生木の楠に彫るのが

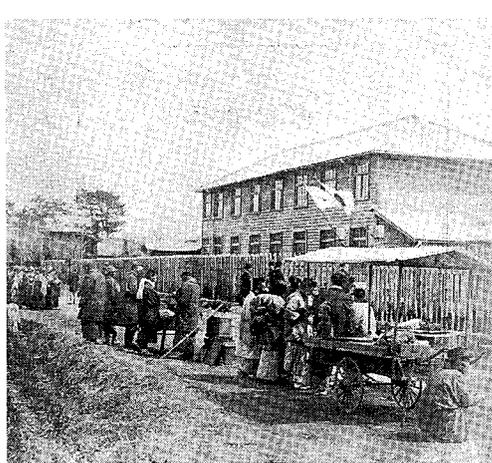
### 震災復興ブームで生れた 生木大黒天 今では板橋お地藏さんへ

ミソであった。しかし町の人々は命のある生木にのみを入れるとその人は死ぬと言う噂が頻りに流れた。私は楠も扱った材木屋だったから木の祟りは信じなかったが、生木の楠には強烈な樟脳成分があるから、これを

もろに吸い込んで身体に毒であろうとその噂に説明を加えた。もともと青橋上の城山一帯には数十本の楠が林を成していたが、その中の大黒天を選んで彫刻したのである。大黒天は大正十三年十月には竣工開眼供養された。当日は周囲に「生木大黒天」の幟を立てまわし、境内で神楽も奉納された。大黒さまは四米もの仮設階段を上がらねば拝顔出来なかった。兎に角最初のうちは物珍しさから参詣客も多かったが、復興ブームが沈静化すると何時の間にか寂れて仮設の社殿も取り外され裸の大黒天がむき出しで風雨にさらされていた。さてそれから又、三年も経ってであろうか、雨ざらしの大黒天を材木屋の私に伐り倒してくれとの話がきた。噂によると彫刻した人の二人が死亡したとかしな

を怖れて一も二もなく断った。処がその後再三再四依頼に来るので止むなく名古屋の銘木商を紹介したところ彼は快よく引きうけた。銘木商は大黒天の下部を切り離し、他を素材とした。そして作業が終ったとき大地に張りつめた根株の部分をお礼にと私に置いていったのである。根株と言っても楠特有の空目がたくさん出ていて楠細工用に珍重されて私は大分儲けさせて貰った。

切り離された本体の大黒天はその後城山のいづくかにひっそりと祀られていたが、昭和五十二年頃、故・武田良作氏の奔走により板橋地藏尊の本堂右に鎮座することになった。今でも私は時折この大黒天さまにお



何処を撮ったものでしょうか 次の写真は、故・尾崎春彦氏が撮影したもので、明治末頃のものと思われます。しかし、何処を撮ったものかはっきりしません。春先、学校の周辺の感じもします。国旗が立っているところをみれば、祝日、それとも卒業式？ 年輩の方々に聞いても、とんと分かりません。

目にかかるが、目の前で見える大黒様は頭でっかちで無様だが、かつて生木のとき下から見上げたお顔は結構福々しく掌を合せたものである。それにしても大黒さまも今では地藏尊に参詣の人にも拜んで貰えるし、私も生木の祟りもなく、八十の長寿を給わりありがたいことと思っている。

『小田原・足柄の発展につくした人びと』

西相模地方の歴史教育を研究している甲辰会(内田清会長)が、この程創立二十五周年を記念し、「小田原ふるさと文化基金」の助成を得て、『小田原・足柄の発展につくした人びと』を発行した。

内容は先人二

新刊紹介

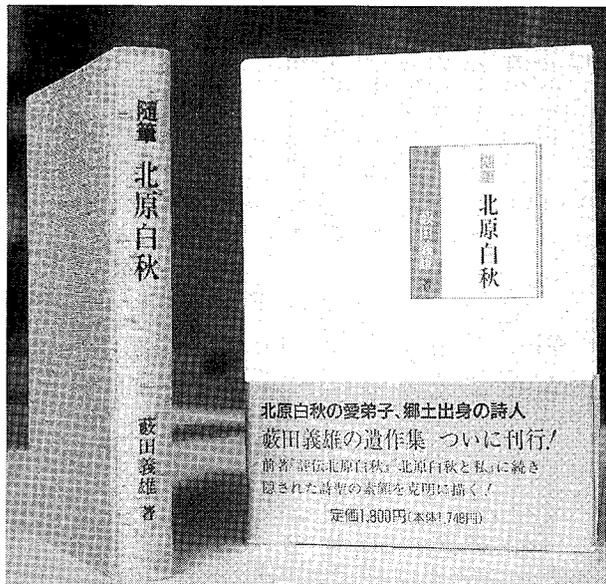
藪田義雄著

『随筆 北原白秋』

小田原市立図

書館では、北原白秋没後五十年を記念して、この程、『随筆 北原白秋』を発行した。同館が特別集書「藪田義雄沙羅文庫」として収蔵する資料の中から選んだ未発表の随筆集で、小田原出身で白秋の門下として永年師事した著書の白秋にまつわる思い出やエピソードが綴られている。なお、表題作の他、詩人大木惇夫、府川恵造など友人との交友を綴った「我が周辺」をあわせて収録。

B6判 三四〇頁 布クロス表紙 貼り箱入り 定価一八〇〇円(消費税込)。



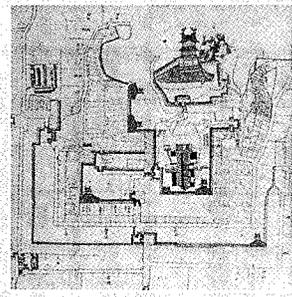
十七人と一グループを紹介したもので、小学校・中学校の児童・生徒を対照に企画されたようであるが、高校生や一般の方々にもお勧めしたい好著である。  
(一)内執筆者  
内容は次の通り  
戦国時代小田原の文化人  
北条幻庵 (山田勲男)  
画像版画で布教した  
日透上人 (中橋教樹)  
人びとの模範となった

林 佐太郎 (石綿勉)  
小田原藩の名君  
大久保忠真 (岩越豊雄)  
農村を立て直した  
二宮金次郎 (高田 穂)  
土地の開発につくした  
山崎金五右衛門  
(桐生盈男)  
小田原の戊辰戦争で活躍した  
中垣謙斎(勝俣淳一郎)  
小田原城までを新田開発した  
宮内太次兵衛  
(内田 清)

市内書店で販売しているが、直接購入希望の場合は、同館(〒二二五〇 小田原市城内七-一七 電〇四六五-二四一一〇 五五)に問い合わせされるとよい。

明治初期の小田原教育につくした  
柏木忠俊  
(日比野英男)  
千代小学校につくした  
大友亀太郎  
(桐生盈男)  
仙石原開拓の父 須長伝蔵 (山口利昭)  
用水争いの解決に努力した  
市川文次郎 (桐生盈男)  
箱根の車道をきり開いた  
松坂萬右衛門  
(鳥居泰一郎)

小田原・足柄の発展につくした人びと



甲辰会

自由民権運動 や地方開発に努めた 中村舜次郎 (宇佐美ミサ子)  
小田原の生んだ狩野派画家 狩野探溟 (井出妙子)  
ホテルと箱根の開発に盡した 山口仙之助 (鳥居泰一郎)  
小田原の社会・育英事業につくした 辻村泰兄 (井出妙子)  
養蚕と製糸事業を進展させた 牧野二三郎(青木 正)  
貧しい村南足柄の教育王 関野光之助 (内田 清)  
治水と農業の発展につくした 河野治平 (古谷松恵)  
女子教育につくした 新名百刀 (飯田輝子)

小田原の史跡を守り、創った 尾崎亮司 (内田 清)  
奥湯河原の開発者 高知尾健次郎(稲葉卓司)  
苦学して医師になった 松島不二 (清水左知子)  
教育者 小田原第三小学校校長 久野春光(渡辺喜充)  
働く人を口語目録でうたった 福田正夫(清水左知子)  
久野へバスを開通させた 小酒部利七とイノ (勝俣淳一郎)  
小田原城内高等学校の創立につくした人びと (日比野英男)

A5版二〇五頁、消費税込み九九〇円。伊勢治書店、八小堂書店、高野書店、みなみ書店、小田原市郷土文化館で発売。

# 古墳遍歴 (五)

## 小田急線に沿って

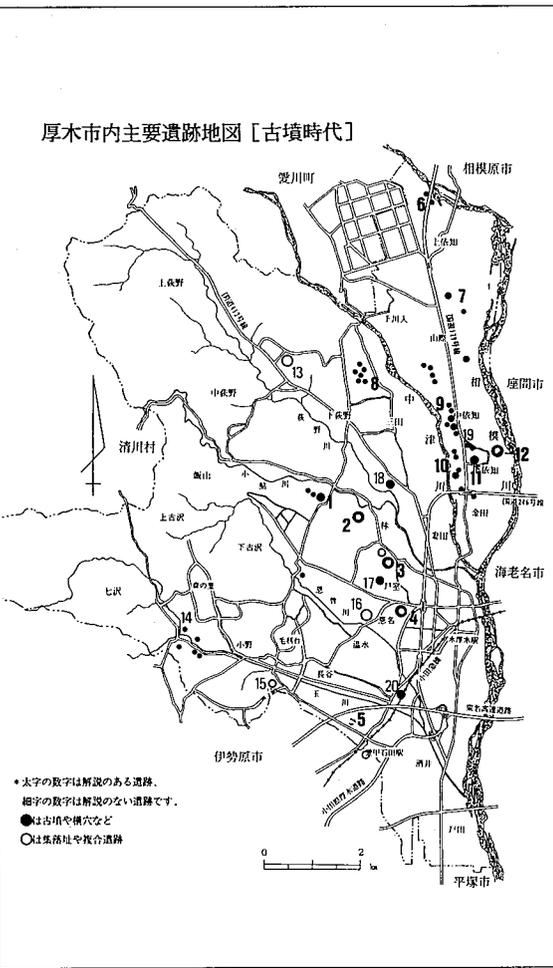
### 点在する古墳群 (5)

飯田悟郎

厚木の名が歴史に登場して来るのはさほど古い昔ではない。江戸時代に入って人口の移動、物資の流通が盛んになってくると、相模川の舟運を含めて、交通の要衝・物資の集散地としてようやく知られるようになり、昭和初期に小田急が開通し、第二次大戦後陸上交通の発達と共にその存在が

重要性を増し、各種機関・官庁・産業施設等の設置が相次いで人口の爆発的增加を助長し、現在の如く市街は整備され、県央の中枢都市としておしもおされもせぬ存在となったのである。古来から住み良い場所であつたらしく、遺跡・史跡にも富み、古墳も多数の存在が知られているが、地

域の開発が進むに連れてほとんどが消滅し、現在墳形を残すものは地頭山古墳・天神山古墳・山ノ上古墳のほか僅か数基に過ぎず、その全てが市街の山寄りの丹沢山塊に派生する台地上、即ち相模川と中津川に挟まれた依知の台地と、小鮎川の流域、尼寺ヶ原から南に伸びる台地、及び玉川の流域に所在している。これらの古墳の中で最も注目に値するものは地頭山古墳であろう。この古墳は厚木市船子にあり、現状では国道二四六号線で分断されているが、元来は南に突きでた舌状台



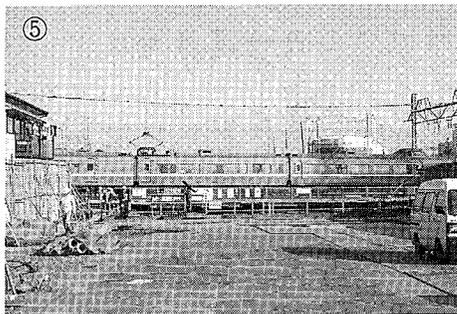
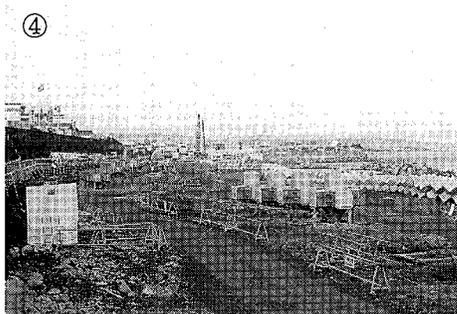
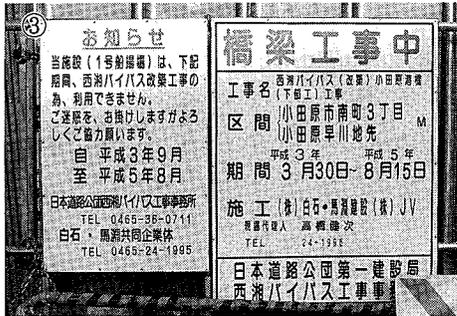
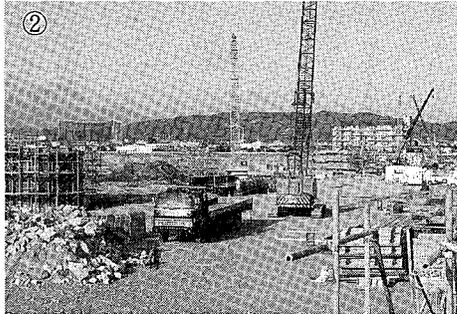
●太字の数字は解説のある遺跡。  
細字の数字は解説のない遺跡です。  
●は古墳や横穴など  
○は集落址や複合遺跡

1 飯山登山古墳	11 吾妻坂古墳
2 株王子遺跡	12 下依知火久根遺跡
3 戸室子ノ神遺跡	13 高心遺跡
4 南毛利遺跡	14 金井古墳群
5 愛甲堂山古墳	15 岡津古久遺跡
6 上依知古墳群	16 恩名片岸遺跡
7 山際堀付古墳群	17 天神山古墳
8 上三田古墳群	18 及川山ノ上2号墳
9 中依知上原古墳群	19 下依知龜崎山古墳
10 金田上ノ原古墳群	20 地頭山古墳

地の先端に作られたもので、東側の一部が崩落しているものの、ほぼ完形を保ち、古墳時代中期前半の様式を示す長軸長七十米余の堂々たる前方後円墳で、川崎市夢見ヶ崎にあった全長九十米強の白山古墳、横浜市の保土ヶ谷付近にあった全長八十米余の瀬戸山古墳の二つが既にアパート群と化している現在では、県内最大の古墳と言つて良い。然し乍ら、これだけの規模を持ち、人里に近く、傍らを国道二四六号線と東名高速道路が走り、小田急線を眼下に望み車馬の往来激しく、恐らくは日々に何千何万の人の目に触れたであろうこの古墳の、その存在がいつい最近まで知られていなかったことは、現代の奇跡の一つではなからうか。昭和五十年代の初頭、あまりの交通量の増加に堪え

たと言つた。計画交通の邪魔だから削れと言つる者。文化財だから残せと言つる者。予算が無いから計画の変更は無理だと言つる者。予算が無くてどうにかして存続を図れと言つる者。すつたもんだの末の結論は墳丘は残し、半地下式の洞門として道を通すこととなり、古墳は消滅を免れたのである。ともあれ、その存在が確認されたのは昭和五十二年八月、実測は翌年二月、保存決定は同年五月であつた。

地頭山古墳とは玉川を挟んで対岸に愛甲宮の名で呼ばれる熊野神社があるが、これも又古墳であると言われている。もしそうだとすればこれもまた相当な規模の古墳であり、今は伊勢原市に属するが、ごく近くに位置する愛甲大塚古墳及び小金塚古墳との関連を考えてみる必要があろう。これらの古墳の被葬者を生み出した生産基盤が玉川流域付近にあったことが窺



え、秋葉山古墳群及びびさご塚古墳等に代表される相模川中流域(現在の海老名市地域)に充分対抗しうる政治勢力がこの辺りに存在したことの証拠であろう。これはまた、旧玉川村小野にある式内社の小野神社の存在とも無縁ではあるまい。今後とも考究が待たれる所以である。

相模川以西では珍しく埴輪が出土したのは市内飯山の登山(ドウヤマ)古墳で、開発に伴い削平され消滅してしまっただが、昭和四十二年の緊急発掘調査の結果、直径二十米、巾約四一五米の周濠をめぐる、高さ三米の円墳であると確認されたが、この古墳で注目され

るのは出土した百体以上の埴輪で、朝顔型円筒埴輪のほかには家・人物・動物等の形象埴輪も発掘され、特に鷹匠埴輪・倍形埴輪と呼ばれる人物埴輪二体は全国的にも珍しい出土品である。

及川団地建設の際に発見されたのは山ノ上古墳群で二基から成り、その二号墳は県内でも数少ない方墳であることから保存されることになり今に至っている。

尼寺原には県立厚木高校の北側、龍興山浄雲寺の背後に天神山古墳がある。

開発の波が此処まで押し寄せ、住宅群に囲まれてしまっているが、往昔は多数の小古墳を従え、威風凛々を払っていたに相違ない風

格を未だに保っている。その他の小古墳群は現在殆どが消滅し、残されたものも埴輪がくずれ、あわれな姿となっている。

尚、これらに関する資料は厚木小学校の近くの厚木市立寿図図書館内の郷土資料展示室にあり、埴輪も見学できる。

(付記)  
寒川応神塚(オオガミヅカ、大神塚とも呼ぶ)古墳は寒川神社の東南一キロ余、寒川小学校の南二百米程の安楽寺境内に所在する。

長軸長五十米余、後円部径二十米程の帆立式に近い前方後円墳で、寒川大神を

祀るものと言ひ伝えられてる。

最近までこの境内に幼稚園が経営されていて、園児達が登り下りしたりしてかなり形は崩れているが、堂々たる風格は現在も窺うことができる。

最近の開発ブームで住宅がびっしりと建ち並び、様相がすっかり変わってしまいい、一月二十六日の初詣の際にご案内に失敗したため、後日早速実地に確かめて報告する次第。

改めて不手際をお詫び致します。

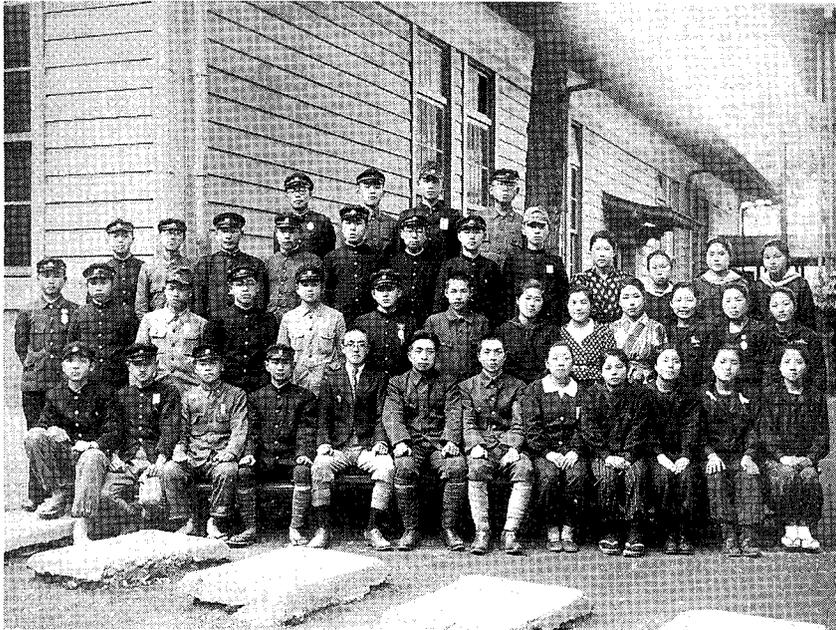
(飯田)



小田原の三つの公共工事

- ① 新酒匂橋新設工事
- ② (JR鉄橋と酒匂橋中間)
- ③ 西湘バイパス小田原漁港橋工事
- ④ 小田急線立体街路工事(道路新設による)





三年生は昭和十九年七月二十一日に川崎市溝の口の日本光学株式会社に、二年生は十二月十一日より日新工業株式会社小田原工場、一年生は昭和二十年三月三日より内閣印刷局酒匂工場に動員されました。結局は入学してきた生徒全員が動員され、学校は学校として本来の機能を発揮せず、ただ

単に制度としてのみ存在するという大変に奇妙な状態となったわけです。この状態は、敗戦の日、八月十五日まで続くのです。

この間、私も小田原中学校に在学していた生徒として、勤労動員に関連して銘記しておくべきことがあるのではなからうかと思えます。

それは、昭和二十年六月十一日に四年三組(私どもから云えば一級下)の鍵和田武男さんが、動員先の日本光学株式会社に作業中に空襲に遭遇、被弾し、治療の効なく死亡されたということです。この尊い犠牲者を出したことは、同窓の一員として今もなお痛恨の思いを残すものです。このことは、この戦争で肉親の一人を失ったものとして、ご家族の方々のお気持ちを推察しますとたまらぬ思いが致します。

動員先の第二海軍火薬廠には小田原中学校のほか、日本大学予科学生、平塚工業学校、平塚高等女学校、平塚実科女学校、山梨県立日川中学校、山梨県私立祖山中学校および茨城県立麻生中学校の生徒が動員されており、遅れて平塚市立国民学校高等科が加わりました。

各人は各部、各工場に配属され、それぞれの職務について、苦情も言わずにただひたすらに、それなりの能力を出しきって、生産に努力していたように思います。

なお、廠内には、私達生徒のほかには徴用工、女子勤労挺身隊等多数の方々があり、その数は恐らくは本工と同数ぐらいか、むしろより多かったのではなからうかと思えます。しかも、本工にしろ徴用工にしてもかなりの年配者で、恐らくは大半の者が五十半ばを過ぎていたのではないのでしょうか。これらの多くの方々、私どもとはいささか異なった社会に精通されており、また私どもは異なった話題に引きずり込まれ、面食らっ

た経験が数多くあったことを思い出します。要するに、昭和十九年の需要産業における生産を担当する者は、かなりの限界に達しつつあったのではないかと受け止められます。

(二) 第二海軍火薬廠の概要

私どもの動員先の第二海軍火薬廠についての実態は、あまり明らかにされないまま過ぎてきましたが、一応現在知りうる範囲でその歴史と概要について説明しておきましょう。ただし、現存する文書で私が入手できるのは、公文書に相当するようなものではなく、単なる過去の思い出集、しかも昔を懐古するといった程度のものであったことをまずお断りしておきます。

この写真は、四ヶ月半後に終戦を迎えるとは思わず、将来に不安を感じいまの内に、母校の城内小学校で恩師を囲み、お別れ会を催した際に撮影したものです。中学生の戦闘帽に脚絆、履物の下駄は当時を物語り

前中央右より奥津福太郎先生、加藤恭兄先生、加藤利貞先生、その左隣り写真提供者、大久保忠幸氏 (湯川玲子)

第二海軍火薬廠の歴史は古く、明治三十八年(一九〇五)六月にイギリスのアームストロング会社、ノーベル火薬会社およびチルウオール火薬会社の三社の共同により日本爆発物製造会社を設立、工場を平塚に建設し、明治四十一年十二月から火薬の製造を開始しました。その後、大正八年(一九一九)三月海軍が買収し、海軍火薬

廠として正式に発足しました。その規模は順次拡大し、昭和十九年頃には総敷地面積は約一三八・六万平方メートル、従業員数約七、〇〇〇名、火薬の年製造能力は六、二八〇トンに及んだといわれています。

海軍火薬廠は、昭和十六年に機構改革により宮城県船岡にありました火薬支廠が第一海軍火薬廠となり、平塚は第二海軍火薬廠となりました。ちなみに第三海軍火薬廠は舞鶴にありまし

た。その他、海軍の火薬の生産には民間の軍需工場も多数参加しており、その生産量は相当なものに達していたようです。第二海軍火薬廠では無煙火薬を主体とした発射用火薬の製造を主とし、砲用九種類、機銃用五種類、ロケット用二種類が作られていたといえます。

第二海軍火薬廠は総務部、製造部、研究部、会計部および医務部の五部から構成されており、この中で、火薬の生産を行う製造部は第一工場から第七工場まであり、それぞれの工場では次のような業務を行っていました。

第一工場は、各種の大砲用発射薬、ロケット用無煙火薬の製造。

第二工場は、各種の硝化綿の製造、各種混酸の調整。

第三工場は、各種の酸の製造、廃酸の回収、石灰ガスの製造。

第四工場は、設備、機械類の設計、据え付けおよび調整。

第五工場は、各種の機銃用発射火薬の製造、溶剤の回収。

第六工場は、無煙火薬の貯蔵、大砲用無煙火薬の選別以降の作業。

第七工場は、ニトログリセリンの製造、第一工場の火薬の配合作業であり、動員された学生、生徒のほとんどは総務部と製造部に配属され、製造部では第一工場と第五工場が主体であったのではないかと思います。

一、私の場合

第二海軍火薬廠にて

私は第五工場の第二成形に配属されたと記憶しています。五十年近い時間の経過は、老化現象をも含めて記憶を大変に曖昧なものにしています。とくに戦後早い機会に小田原を離れ、多

くの友人と接する機会が少なくなり、顔を合わせたときも昔の勤労働員の苦しい思い出は話題になる機会も少なかったこともその一因でしょう。

戦後十数年を経て、私が勤務していた農林水産省の研究所の組織の一部でありました生理遺伝部遺伝科が隔地試験地として平塚市の火薬廠跡に設置され、昭和五十三年に筑波研究学園都市に移転するまで、第五工場の建物をそのまま利用していました。

私は遺伝学に少々関係した分野も担当していたので何度か出張したことがありますが、土壘こそ撤去されていました。頑丈なコンクリート壁で作られた建物、間仕切りは昔のまま、昔の面影を留めながらも研究室独特の雑然とした景観に変わっているのを見て、ある種の苦渋を含め異様な感慨に襲われたものです。

動員されて以降、毎日平塚駅から隊列を組んで平塚八幡宮の脇を通り、火薬廠へとひたすら歩く。火薬廠

小田原旧町名 保存碑

安齋町

〔南町二丁目一番地 朝倉修一氏宅周辺〕



の正門をくぐると間もなく装置化された高い塔が現れる。各種の酸や硝化綿、石灰ガス等を製造する装置・工場群がある。広い石炭置場を過ぎると、異質さの感じられるやや広い高等官らの居住区、事務室、食堂等が並ぶ。それらを過ぎると、その奥に広大な松の疎林地帯に散在する工場群がある。

工場は、爆発物を作ることから、爆発した場合に類を他に及ぼさないように、作業工程ごとに高さ四〜五メートルの芝生で覆われた土壘で囲まれ、それが作業工程の流れにしたがって並んでいる。周辺には松林が多く、かつ空間も広くとられており、比較的ゆったりとしており、火薬を作るということを考えなければ、環境としてはまあまあといったところであったと思う。第五工場の事務室は、ごく簡単な木造建築で、周辺

は石炭殻が一面に敷きつめられ、多分低地か湿地であったところを埋め立てた場所にポンと建てていた。事務室には尉官の海軍士官(複数であったかどうかは今定かではない)を責任者として、二、三人の女子事務員がおり、事務的な問題は総べてそこで処理されていた。

毎朝、朝礼があり簡単な訓示を聞いた後、各自それぞれの職場へ向かうという日課になっていた。訓示の内容については時がたし、場所が場所であったから大体的見当はつくものの、今はまったく思い出せません。また、周辺におられた方々の氏名についても、ほとんどが忘却の彼方へ去ってしまっています。記録を捜してみましたが長い年月の間に失われ、友人の援助がなければ思い出すのは困難です。

大変な時期に、一緒に苦  
労した方々のお名前を忘れ  
るなどということは、まっ  
たく失礼なことと反省はし  
ていますが今になってほど  
うにもなりません。ただ、  
極めてはつきりと記憶に残  
っていることは、事務室に一  
匹の日本猿が飼育されてい  
たことで、何故にあのよう  
な場所に猿がいたのか定か  
ではないのです。かなり荒  
みつつあった私どもにとっ  
ては、無邪気に行動する猿  
の存在は今でも忘れられま  
せん。

第五工場は、前に説明し  
たように各種機関銃の発射  
用火薬を製造していました。  
それも主として航空機に  
搭載された機関銃用の一三

mm、二〇mmと、対空用の二  
五mmその他であったよう  
です。

工場内の各生産行程は、  
前に説明したように建物ご  
とに幅三〜四m、高さ四〜  
五m程度の土壘で囲まれ、  
建物間の連絡はすべて土壘  
に開けられたトンネルを通  
じて行われていました。し  
かも、通路には縦横に軌道  
が敷かれ、資材、製品の運  
搬はすべてトロッキコによっ  
て行われていました。建物  
の側壁は頑丈なコンクリー  
トで作られている反面、屋根  
はごく簡単なスレートぶき  
で、もし火薬が爆発したと  
しても、横方向への被害は  
最小限にとどめ、爆発によ  
る圧力の大部分は上空に向

かって放散させ、周辺の工  
場への被害を最小限にとど  
めるよう細かな配慮がなさ  
れていたのです。

また、生産過程の危険度  
の高い要素所には、天井  
部分に水槽が設置され、発  
火の際には放水できるよう  
用意されていたのも極めて  
印象的でありました。

第五工場における火薬の  
生産過程をごく大雑把に説  
明すると次のようです。

駆水↓捏和↓圧伸↓切断↓  
光沢↓乾燥↓混同↓製品  
駆水とは綿火薬を駆水機  
にかけ、エチルアルコール  
によって水を除去し、次に、  
この綿火薬をコンクリート  
ミキサー様の捏和機に入れ、  
アセトン・エチルアルコー  
ル・エーテルの溶剤を加え、  
二時間程度捏和混合し餅状  
とします。これをコンクリー  
ト二階建て圧縮場に運び、  
二階にあるプレス機によっ  
て四〇〜五〇本のスパゲティ  
様の紐状にして一階の作業  
場に向けて圧出する。ごく  
簡単に言えばトコロテンの  
突き出しを考えればよいの  
だが、餅状の火薬を圧出す  
るのでから大きな圧力を  
必要とし、このために油圧  
ポンプが継続的に勢いよく

動いていたのが印象的でし  
た。

ここで使われていたプレ  
ス機は、英国のアームスト  
ロング製でしたから、かな  
り古いものでした。しかし、  
激烈な国家の存亡をかけた  
戦争をしているさなかとし  
ては、敵国製の機械に依存  
しながら戦争をしているわ  
れわれの立場にいささかの  
戸惑いを感じたものです。

また、スパゲティ状に  
圧出された紐状の火薬の太  
さは四mm〜五mmでしたが紐  
の中央には穴があいており  
管状になっていました。こ  
れは火薬の燃焼をより一様  
にする(燃焼時間が短ければ  
短いほど爆発力は強くなる)  
ように表面積を広くするた  
めの手段です。このことに  
ついて、個人的に工場の技  
術将校と話をしていたとき、  
アメリカでは同じ太さの中  
に五つから七つの穴を開け  
ている、と話をされたこと  
を今も忘れません。

てくる火薬を長さ四m、幅  
五〇cmぐらいの底が網になっ  
ている机?の上に、人手で  
火薬の束を掴み、降りてく  
る速度に合わせて机の端ま  
で運びそこで切り、再び元  
に戻って同じことを繰り返  
すのです。この作業は一回  
のプレスが一セットとなり、  
一セット圧出し終わると伸  
ばした火薬を四〇cm程度に  
切り、縦五〇cm、横一m、  
深さ四〜五cmで、底が金網  
の棚に移し、トロッキコに設  
置された棚に何段にも積み、  
一杯になると二人がかりで  
ゴットン、ゴットンと土壘  
をくぐり次の工程の裁断に  
運びます。

裁断では、紐状になった  
火薬を四mmぐらいの長さに  
ギロチン様の裁断機で連続  
的に切り刻み、篩にかけて  
均一な長さの粒に揃えます。  
その後の行程はあまり明  
らかではないのですが、ご  
く簡単に説明すると次のよ  
うであったと思います。裁  
断し、整粒した後に湯につ  
けて溶剤を完全に揮発させ、  
黒鉛をまぶして滑らかにす  
るとともに光沢を付け、さ  
らに乾燥し、品質を均一化  
するための操作を加えて製  
品となります。

余談はさておいて、紐状  
の束になって二階から降り

### 川柳

高井喜雄

初孫を抱いて女房角がとれ

そばにいた人が叱られる孫の怪我

あざなえる縄のようにかぬ運

屁をこいておかしくもない独り者

頼りない犬だから猛犬と書き

## 紅蓮洞・坂本易徳 ⑨

岡部 忠 夫

明治二十四年(一八九一)の夏の初め、坂本易徳は、三田の通りで偶然北村透谷と出合い、彼を自分の下宿先に誘った。

このとき、彼は、透谷に『蓬萊曲』を批評してくれと、頼まれた。それは易徳が慶応義塾大学部文学科に在学している話をしたためである。(前号)

前にもちよっと記したことがあるが、坂本易徳は北村透谷の印象について次のように述べている。

透谷は、啓蒙学校時代、

透谷碑建立を記念して透谷会が発行した絵葉書



打れた  
喉を  
夏も  
易徳

北村透谷の肖像と題

があったが、透谷は加入しなかった。余り大勢集まらず騒ぐことが嫌いなのであつたかも知れない。

忠告社というのは、その名称からして、お互いに切磋琢磨して向上を計ろうとする趣旨の団体であろうというのには想像がつく。対象は少年層を対象としたのかも知れないが、今となっては、その組織や運営がどのようなになっていたか知る由もない。なお、社というのは、以前に触れたが、明治の中頃迄は、グループや団体の意味に用いられた。

共に遊ぶようになったのは、易徳が霜焼で透谷の祖父創製の金明膏を貰いに行くようになってからで、学校がひけてから撃剣の道場に通うようになり、一層親密の度を増した。

しかし、子供のときの付き合いなので、これという思い出も残っていない。

易徳の記憶の中にある透谷は、小田原の啓蒙学校の小学校時代の映像であった。易徳が透谷と分かれたのは明治十四年(一八八二)春先、

易徳が十四歳のときだった。

透谷は、両親、弟と共に移住、一家は京橋区弥左衛門町七番地に住んだ。透谷の号は、近くの数寄屋橋のスキヤからとったといわれている。

透谷の父快蔵は、大蔵省に再び出仕した。

快蔵は明治六年(一八七三)大蔵省に出仕したが、一年に祖父玄快が中風で倒れたため、官を辞して、母、弟を伴い小田原に帰郷し、足柄上郡々役所の上席書記となつて関本に通動した経緯がある。

(註) 岩波書店『透谷全集』年譜には、松田に通動とあるが郡役所が松田に移つたのは明治十三年(一八八〇)八月四日のこと。それまでは関本の郡役所に勤務したと思われる。

一家が帰郷する迄は、透谷は、小田原に残され、祖父継祖母に育てられていた。何故、透谷が祖父母の許に残されたか、その辺の事情は明らかでないが、上京すると、母は、弟垣穂の姓、丸山の名儀で、金明膏の看板を出し、売薬や煙草小売などの店を開いた。弟の姓が異なるのは、明治十二年

(一八七九)元小田原藩士丸山良伯の絶家を継いだためである。

透谷は、弟と共に京橋の泰明小学校に転入した。

この編入した明治十四年(一八八二)というところ、開拓使官有物払下事件を切っ掛けに、自由民権運動が高潮のように大きなうねりを見せ、時局は揺れにゆれ、時代に一つの転機をもたらした年でもあった。

奇才透谷も時代の子である。自由民権運動の思潮に触発されて、政治家になろうと志し、演説の稽古をしている。ときに、彼が泰明小学校卒業学年の十二歳のときのことである。

翌明治十五年(一八八二)一月の卒業式当日、透谷は、「空気がび水の組成」と題して発表をしている。易徳が言う透谷は、人目に立つた事のない存在から既に抜け出していたのであろう。

小学校卒業後、二、三の塾を転々としているが、ある塾では、彼が門太郎という名と、あから顔のためモンキーという仇名がつけられたという。彼が後に自ら命を絶つたことを考えれば、この仇名からは、色白で蒲

柳の質の秀才タイプを連想  
しがちだが……。

ずっと後年のことになる  
が、正確には昭和二十九年  
(一九五四)五月十三日、透谷

と彼の妻美那の墓が、東京  
芝白金台の瑞聖寺の墓地か  
ら小田原谷津(現城山一丁  
目)高長寺の墓地に移され  
た。それは透谷の六十年祭  
を期に実施されたもので、  
当時六十年祭の責任者とし  
て、改葬に立会った、小田  
原市教育委員会教育課長の  
中野敬次郎先生は、そのと  
きのことを、「当時は土葬

であったので遺骨はそのま  
まで、意外にも立派な体格  
であった」と言われたこと  
があった。

明治十六年(一八八三)九月  
透谷は、早稲田大学の前身  
東京専門学校政治科に入學  
した。十四歳のときのこと  
である。三多摩地方の人情  
を愛し、この地を放浪して  
自由民権運動の青年たちに  
出合い交友を持つのもこの  
年である。その友の中には、  
五歳年上の小学校の臨時教  
員大矢正夫がいた。

楚囚之詩。

第一

北村門太郎著

曾って誤つて法を破り

政治の罪人として捕はれたり、

余と生死を誓ひし壯士等の

數多あるうちに余は其首領あり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花ある少女も、

國の爲とて諸共に

この花術も花嫁も。

第二

余が楚は何時の間にか仰ひていと長し、  
前領を蓋ひ眼を遮りていと重し、  
肉は落ち骨出て胸は常に枯れ、  
沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、

明治十八年(一八八五)、透谷  
(一八七〇)の夏、三  
多摩の自由民権運動の指導  
者石坂昌孝の長女美那と熱  
烈な恋愛に陥り、美那を介  
してキリスト教に入信、翌  
二十一年十九歳で美那と結  
婚するに至った。  
翌二十二年二月、『大日  
本帝国憲法』が発布されて、  
大阪事件の関係者は大赦で  
出獄した。この年の四月、  
透谷は『楚囚之詩』を処女  
出版したが、ほとんど世に  
受け入れられなかった。彼  
は続いて二十四年(一九〇一)  
五月、『蓬萊曲』を出して、  
再び世に問うた。

易徳が慶応義塾の大学部

民主改革をやらせるとい  
うものであった。そのため武  
器や資金集めのための非常  
手段として、強盗の決行参  
加を、決死隊に入っていた  
大矢正夫から誘われたので  
ある。

透谷は、この計画をうち  
あけられ、悩み、苦しんだ。  
結果、彼は遂に年来の自  
由民権運動の盟友たちと決  
別し、ユーゴのような文学  
者となって、人の心の内面  
に働きかけて、政治的理想  
を達成しようとするよう  
になった。

入学してからのことであ  
る。銀座を散歩していると、  
ある本屋の店先に幅三寸位  
縦三尺位のペンキの板に  
「北村門太郎著楚囚之詩」  
と書いてあるのを目撃をし  
た。

しかし、易徳は、『楚囚  
之詩』に何が書いてあるや  
ら、その内容も知らず、ま  
た、八著者が子供の頃遊ん  
だ友達と同じだ、世の中に  
は同名異人がいるものだ、  
という程度のことしか、頭  
に浮かばなかった、という。  
もっとも、そのため透谷  
との出会いに、この一件を  
話題とすることが出来たの  
かも知れない。

ここで話をちよっと戻し  
たい。  
透谷は、この『楚囚之詩』  
を自費出版するに当たって、  
広告を徳富蘇峰が主宰する  
『国民之友』三十号に出し  
ている。

北村門太郎著作  
楚囚之詩(定価郵税共八錢)  
此著は近年の新体詩中に一  
新現象を画出せるものなり  
此著は結構、閑節、用韻  
の方等総べて新軌軸を出せ  
る者なり  
此著は国事の犯罪人が獄  
中にありて感情と境遇とを  
穿てる者なり

販売元 銀座四丁目春祥堂  
大売捌 博聞社 東海堂  
良明堂 其他書肆雜誌店

易徳にとつては、記憶の  
中にある北村門太郎は、度  
たび記すが、平凡な存在で  
あった。それに余りにも身  
近かであったため、盲点の  
中であつたのであろう。  
それにしても、易徳が透  
谷の叙事詩に評を加えるの  
は、無理なことであつた。  
透谷と同時代に生きて、透  
谷と共通の悩みはあつたに  
せよ、易徳には純文学につ  
いて関心がなく、気持ちは  
別の方向に向かつていたか  
らである。

この広告文は透谷が書い  
たものであろう。若々しい  
自信に満ちた言葉が連なつ  
ている。彼には作品につい  
て自負があつたに違いない。  
しかし、印刷が仕上がりに  
書店で販売される段階になつ  
て、彼は、この詩を世に問  
うことに激しい恥らいを覚  
え、販売を中止することに  
なつた。(続)

# 小田原史談会諸行事

初詣 平成四年一月二十六日(日)八時小田原駅前出発。十六時五十分帰着。  
〔コース〕相模国二ノ宮・川勾神社(二宮町)―相模国総社・六所神社(大磯町)―相模国四ノ宮・前鳥神社(平塚市)―相模国一ノ宮・寒川神社(寒川町)―相模国一ノ宮・比々多神社(伊勢原市)―桜土手古墳公園(秦野市)。

〔費用〕六千円  
〔参加者〕五十七名(敬称略)  
高田喜久三、富田千春、和田登、天野宏、岡部忠夫、飯田悟郎、富田キミ江、曾我保夫、山口一夫、岩本武、堀越真一、吉池清、小林房子、時田満子、藤曲迪子、木曾正雄・シゲ、伊藤高子、湯川玲子、西山鍾太郎・静、飯沼恒男、廣瀬康子、初田裕子、金子正夫、杉山竹一・房

江、住吉敏子、増山晶子、伊藤岩恵、立石一枝、中澤敏子、中村俊郎、奥津定・チヨ子、久保喜久江、和田ヤス子、河合正幸・多美江、森美奈子、内田美枝子、布施洋子、田口鏡子、剣持芳枝、非山鳩美、土岐静子、山田幸子、南陽子、石井艶子、奥津富子、吉崎ヨシ江、奥津重子、田島迪江、小島美代子、中村友夫・ユキ、佐藤光三。(順不同)

## 落穂集

◎松過ぎの社務所に田舟飾りた  
◎算額の文字読みとれず初明神  
◎四の宮の排寒桜の三分咲き  
◎冬ぬくし円墳あまた重ねたり  
◎昨年の暮の二十六日、弁財天通りを歩いているときでした。

### 特別賛助会員

智恵袋	相田酒造店	正 榮 堂	玉
小田原銀座	アオキ画廊	中華料理	昇
足柄香粧株式会社	飛鳥屋	辰 廣 木まぼこ	ツ
紳士服の	アメリカヤ	辰 壽 堂	不動産
画材	ガクブチ	大 営 不 動 産	海
伊 勢 治 書 店	かまぼこ	割 烹 ぶ る 海	宮
株式会社	江 島	茶半家具株式会社	本店
小澤重治事務所	小田原魚市場	角田ガクフ子店	店
小田原ガ入	小田原信用金庫	東京電力(株)小田原営業所	軒
小田原市農業協同組合	小田原報徳自動車	株式会社 東 華	軒
オートセンター・スギヤマ	小田原中央青果	ト一ホ一建物	軒
オリオン座	かまぼこ 籠	八 小 堂 書 店	店
令 学 苑	鐘紡株式会社小田原工場	八 子 マ 書 店	店
カネボウ化粧品鴨宮工場	神尾食品工業	平 井 書 店	店
かみやま小児科クリニック	興 電 社	富士写真フィルム(株)小田原工場	工場
小 伊 勢 屋	宝飾専門店	株式会社 報 徳	徳
		松 坂 屋	屋
		学生専科	丸
		食器の店	マルサンストア
		株式会社 美濃屋	吉兵衛商店
		みみづく幼稚園	園
		ヤオマサ株式会社	社
		山口菓子舗	舗
		湯浅電池(株)小田原製作所	製作所
		防災器具	優 光 社

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員二千五百円

振替

横振(2) 六四三三六  
小田原史談会会費部

(陶生)

「ワイシャーシュー」「ワイシャーシュー」と聞きなれない声が、道路を隔てたビル建築現場から聞こえてくるではないですか……。見ればヘルメットをかぶった職長風の男が、手元の太いケーブルを階段に繰り上げての掛声でした。姿は見えませんが、出来上がった階段の上には、ケーブルを引っぱりあげる人がいるのでしよう。その人達と調子を合わせての掛声と思われました。職長風の人が日本人か外国人か確認したかったのですが、予定の時間に間に合わせなくてはならないで、残念ながら通り過ぎてしまいました。日本語の掛声ならば「ヨイショ」とか「セエノー」などの筈です。この話を早速知人にしましたところ、外国それもイランあたりではないか、という見解でした。果たしてイランかどうか分かりませんが、ともかく、小田原の街でも聞き馴れない掛声を耳にしました。これも「国際化」の現象でしょう。もっとも国際化という言葉は、どうも曖昧だという意見もあるようですが。

◎次年度から年会費が三千元になります。

◎次号は六月発行を予定しています。